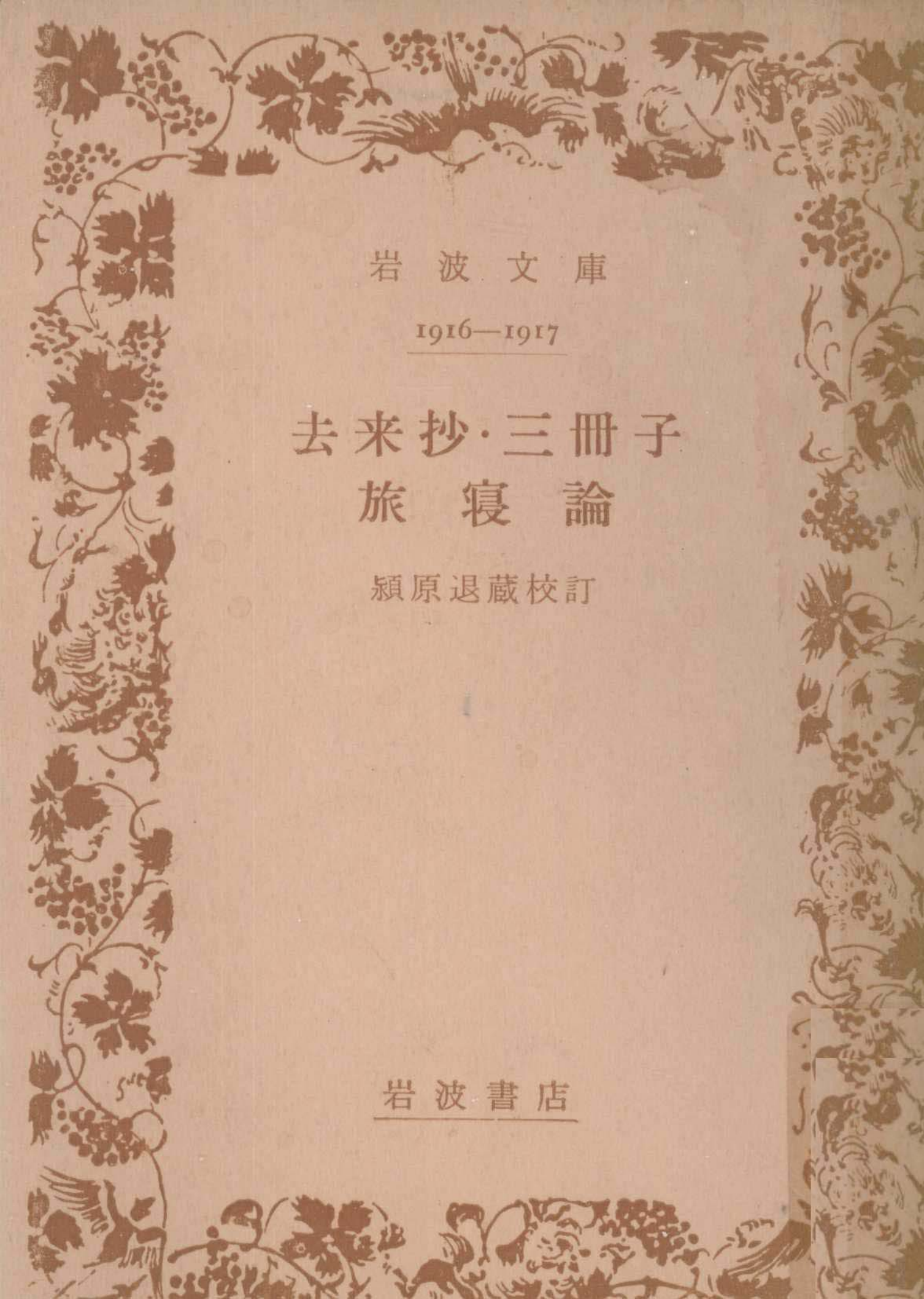




岩波文庫

1916—1917

去來抄・三冊子
旅寢論

潁原退藏校訂

岩波書店

昭和十四年二月十五日 第一刷発行
昭和三十六年一月十五日 第七刷発行

去来抄・三冊子・旅寝論

定価八十円

校訂者

瀬原退蔵

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 東京都新宿区市ケ谷加賀町一丁目三番地
高橋武夫

発行所

東京都千代田区 株式 岩波書店
神田一ツ橋三ノ三 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本印刷・永井製本

岩波文庫

1916—1917

去來抄・三冊子
旅寢論

額原退藏校訂



岩波書店

目次

目次	3
例言	五
去來抄	九
先師評	一〇
同門評	二九
故實	五〇
修業教	六一
三冊子	八一
白さうし	八三
赤さうし	一〇〇
黒さうし	一三五
旅寢論	一五九

解説

一、去來抄について	二〇四
二、三冊子について	二三七
三、旅寢論について	二五四

目

次

例言

一、本書は芭蕉俳諧の研究資料として最も重要な『去來抄』・『三冊子』・『旅寢論』の三部を、諸傳本によつて新たに校訂したものである。

例 一、『去來抄』は古梓堂文庫藏古寫本を底本としたが、同本は先師評と同門評との二篇を傳へるだけで、他の部分は今亡佚して居る。よつて故實と修行教との二篇は、三浦若海舊藏本に朱書校合を加へたものを本文とした。而してなほ左の諸本を參照して本文の異同を校合した。

(一) 三浦若海舊藏本(脚註略符若本) 寫本一冊。神戸、和露文庫藏。三浦若海の舊藏本で卷末に左の如き識語がある。

此書乃翁奥羽行脚の時足利より携來半笠庵五雲軒豫州松山士川端藤太夫于時寶曆九卯年寫 其傳房五嶺

五刻齋之君遊雲井畫嶺 五猶 山光ヨリ傳寫

即ちもと寶曆九年の書寫にかゝるもので、本文は流布版本よりも簡潔になつて居り、必ずしも忠實な傳寫ではないかも知れぬが、比較的古い年代のものとして注意すべき點が多い。

(二) 若海朱書校合本(脚註略符若本) 前記の寫本に若海が朱筆で校合を加へたものである。その校合

に用ひた原本の來歴については全く記す所がない。本文は大體流布の版本と同一であるが、校定上注意すべき異同も少くない。俳書の博覽蒐藏を以て聞えた若海が、特に校合に供した程であるから、諸傳本中最も善本に屬すべきものと見られる。

(三) 贅川他石氏藏本(脚註略符他本) 贅川氏が日本名著全集、芭蕉全集所收の去來抄に底本として用

ひたものである。梶軒素秋の正本によつて知足齋といふ人の筆寫したものだといふ。今名著全集に従つて校合した。

例

(四) 帝國圖書館藏本(脚註略符帝本) 寫本一冊。筆寫年代不詳。

(五) 板本 半紙本三冊。安永四年曉臺の翻刻にかゝり、從來流布本として最も汎く知られたものである。たゞし故實の一篇を全く缺いて居る。

言

その他去來先生確論・無門關等については解説を参照されたい。

一、『三冊子』は安永五年關更の翻刻した板本を底本とし、なほ左の諸本を校合に用ひた。

(一) 猪來舊藏本忘水(脚註略符チ本)

(二) 杉浦氏藏書入本(脚註略符ス本)

(三) 帝國圖書館藏本(脚註略符テ本)

(四) 大蟲舊藏本忘水(脚註略符エ本)

右の諸本については解説を参照されたい。

一、『旅寝論』は九州帝國大學附屬圖書館藏の古寫本を底本とし、なほ左の諸本を校合に用ひた。

(一) 京都帝大國文研究室藏本(脚註略符 京本)

(二) 寶曆十一年刊去來湖東問答(脚註略符 湖本)

(三) 安永七年刊旅寐論(脚註略符 板本)

右の諸本については解説を参照されたい。

例

一、本文はすべて底本の本文のまゝとし、只便宜上句讀點と濁點とを加へた。たゞし原本に既に濁點を施してあるものは、特にマ、と註してこれを區別した。

一、諸本による異同の校合は、あまり輕微なものは省略した。特に『去來抄』・『旅寝論』の板本、『去來湖東問答』の如き活字翻刻本あるものとの校合は、その重要な部分のみにとどめた。なほ古梓堂文庫藏古寫本去來抄は、塗抹訂正の跡が明かに判別される箇所については、努めてこれを註記する事にした。

言

一、解説の「去來抄について」は拙著『俳諧史論考』所收「去來の遺著」の中から、去來抄に關する部分を抄出して若干補訂を加へたものである。「三冊子について」と「旅寝論について」とは今新たに起稿したものであるが、前者は杉浦正一郎氏の研究に、又後者は松本義一氏の論

文に負ふ所が極めて多い。特に記して感謝の意を表する。

一、『三冊子』の異本校合について杉浦正一郎氏に多大の助力を得、猪俣舊藏本忘水の調査校合に伊賀上野の村治氏並に服部氏から便宜を與へられ、又九州帝大圖書館は同館藏の『旅寢論』古寫本の翻刻を許可され、同大學の小島吉雄氏はこれについて種々斡旋の勞をとられた。記して諸氏の好意を厚く謝する。

例

昭和十三年十一月

潁原退藏識

言

去
來
抄

去來抄

先師評

外人之評有といへども先師の
一言まじる物は此に記す

去

蓬萊に聞ばやいせの初だより

芭蕉

來

深川よりの文に、此句さまぐの評有、汝いかゞ聞侍るやと也。去來曰、都古郷の便ともあらず、いせと侍るは元日の式の今様ならぬに、神代をおもひ出でて、便聞ばやと道祖神の、はや胸中をさはがし奉るところそ承り侍ると申。先師返事に曰、汝聞處にたがはず。今日神のかうぐ敷あたりをおもひ出で、慈鎮和尚の詞にたより、初の一字を吟じ侍る計なりと也。清淨のうるはし、神祇のかうぐしきあたりを、蓬萊に對して結たる迄也。汝が聞る所珍重ト也。

抄

辛崎の松は花より隴にて

芭蕉

伏見の作者、にて留の難有。其角曰、にては哉にかよふ。この故に哉ど

○先師返事に曰 原本この

下右傍に「いせに知人音信て便りうれしきと、慈鎮和尚のよみ侍る便りの一字の出處にて、聊歌のこゝろにたよらず」と書いたまゝになつて居る。

若朱本「からぐしきあたりを思ひ出で、伊勢のしる人音信て便りうれしきと慈鎮和尚のよみ侍るたよりの一字の出所にて脚音(二字本ノマ、)の心にとよらず、汝が聞清淨のうるはしく神祇のかうぐし敷あたりを」

○清淨のうるはし その上に「汝が聞く」と加へてそのまゝにしてある。

○辛崎の この條『無門關』にも見え、本文は同一。

めのほ句に、にて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫なれば、にてとハ侍也。呂丸曰、にて留の事は已に其角が解有。又此ハ第三の句也。いかでは句とはなし給ふや。去來曰、是ハ即興感偶にて、ほ句たる事うたがひなし。第三ハ句案に渡る。もし句案に渡らば第二等にくだらん。先師重て曰、角・來が辨皆理窟なり。我ハたゞ花より松の隴にて、おもしろかりしのみト也。

行春を近江の人とおしみけり

はせを

來 先師曰、尙白が難に、近江は丹波にも、行春ハ行歳にも有べしといへり。

抄 汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難あたらず。湖水朦朧として春をおしむに便有べし。殊に今日の上に侍るト申。先師曰、しかり、古人も此

國に春を愛する事、おさく都におとらざる物を。去來曰、此一言心に徹す。行歳近江にゐ給はゞ、いかでか此感ましますさん。行春丹波にゐまざば本より此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事、眞成哉ト申。先師曰、汝ハ去來共に風雅をかたるべきもの也と、殊更に悦給ひけり。

此木戸や錠のさゝれて冬の月

其角

○第二等にくだらん 原本

「此句又はるか下品ならん」を改む。(改むとあるのは、それを朱又は墨で抹削して、本文の如く書改めである意。以下すべて同じ。)

○おもしろかりし 原本
「なつかしかりし」を改む。

○丹波にも 若朱本・他本
「難波にも」

○行春ハ云々 若本「行春は行年にふるべし」若朱本・他本「行春は行年にもなるべし」

○古人も 原本「むかしより」を改む。

○おさく都に 若本・他本「多く都に」

○丹波にゐまさは 若朱本・他本「難波に居まさは」

○此木戸や この條『無門關』にも出でほゞ同文。

猿みの撰の時此句を書おくり、下を冬の月・霜の月置煩ひ侍るよしきこゆ。然るに初は文字つまりて、柴ノ戸と讀たり。先師曰、角が多・霜に煩ふべき句にもあらずとて、冬月ト入集せり。其後大津より先師の文に、柴戸にあらず、此木戸也。かゝる秀逸は一句も大切なれば、たとへ出板に及とも、いそぎ改むべしと也。凡兆曰、柴戸・此木戸させる勝劣なし。去來曰、此月を柴の戸に寄て見侍れば、尋常の氣色也。是を城門にうつして見侍れば、其風情あはれに物すごくいふばかりなし。角が多・霜に煩ひけるもことなり也。

うらやましおもひ切時猫の戀

越人

抄 先師伊賀より此句を書贈りて曰く、心に風雅有もの一度口にいでずと云事なし。かれが風流此にいたりて本性をあらはせりト也。此より前、越人名四方に高く、人のもてはやすは句おほし。しかれども此に至りて、初て本性を顯すとはの給ひけり。

風に二日の月のふきちるか

荷兮

風の地にもおとさぬしぐれ哉

去來

○冬月ト入集せり 原本「已に猿みのに入集せり」を改む。若本「冬の月として入られたり」無門關・若朱本・他本・板本「冬の月に定め入集せり」

○物すごく 原本「物さびて」を改む。

○うらやまし この條「無門關」にも出でば同文。

○風雅 板本「俗情」とあるが、無門關・若本・他本・猿蓑逆志抄引用の去來抄等すべて「風雅」とある。

○四方に高く 原本下に「先師の賞も」とあつて削る。

○風に・風の この條「無門關」にも出でば同文。なほ右二句については『葛の松原』にも評がある。

去來曰、二日の月といひ、吹ちるかと働たるあたり、予が句に遙か勝れりと覺ゆ。先師曰、今が句は二日の月といふ物にて作せり。其名目をのぞけばさせる事なし。汝が句ハ何を以て作したるとも見えず。全體の好句也。たゞ地迄とかぎりたる迄の字いやしとて、直したまひけり。初は地迄おとさぬ也。

去

春風にこかすな雛のかごの衆

來

先師此句を評して曰、伊賀の作者あだなる處を作して、尤なつかしと也。丈艸曰、いがのあだなるを、先師はしらずがほなれど、其あだなるは先師のあだならざるゆへ也。

抄

清瀧や浪にちりなき夏の月

はせを

先師難波の病床に予を召て曰、頃日園女が方にて、しら菊の目にたてゝ見る塵もなしと作す。過し比ノ句に似たれば、清瀧の句を案じかえたり。初の草稿野明がかたに有べし。取てやぶるべしと也。然どもはや集くにもれ出侍れば、すつるに及ばず。名人の句に心を用ひ給ふ事しらるべし。

○春風に この條『無門關』にも出づ。若朱本・他本・板本には作者荻子の名を記す。

○いがのあだなるを云々 原本「いがのあだなるも又先師の一體にあり。之伊賀の作者のみこととをよく學べり」を「いがのあだなるは先師のあだならざるゆへなり」と改め、更に本文の如く改む。

○先師のあだならざるゆへ也 無門關・他本・板本「先師のあだならずや」若朱本「先師のあだならざる也」○すつる 原本「かくす」を改む。

すゞしさの野山にみつる念佛哉

去來

此ハ善光寺如來の洛陽眞如堂に遷座有し時の吟にて、初の冠ハひいやりと也。先師曰、かゝる句は全體おとなしく仕立るもの也。又五文字しかるべからずとて、風薫ルと改め給ふ。後猿蓑撰の時、再び今の冠に直して入句ましくけり。

去

面梶よ明石のとまり時鳥

野水

猿ミの撰の時、去來曰、此句ハ先師の野をよこに馬引むけよと同前也。

來

入集すべからず。先師曰、明石の時鳥といへるもよし。來曰、明石の時鳥はしらず。一句たゞ馬と舟とかえ侍るのみ。句主の手柄なし。先師曰、句の働におゐてハ一步も動かず。明石を取柄に入れば入なん。撰者の心なるべしと也。終に是をのぞき侍る。

抄

君が春蚊屋はもよぎに極りぬ

越人

先師語予曰、句はおちつかざれば眞のは句にあらず。越人が句已に落付たりと見ゆれば、又おもみ出來たり。此句蚊屋ハもよぎに極たるにてたれり。月影朝朗などゝ置て、蚊屋のは句となすべし。其上にかはらぬ

○すゞしさの 若本「涼さは」若朱本・他本「涼しくも」句は『續猿蓑』に出で「涼しくも」とある。
○此ハ……ひいやりと也 原本「初の冠はひいやりと也。此は……吟にて」を改む。

○面梶よ 板本「面楸や」とし作者「荷兮」とある。句は『嘯野後集』に「面楸やあかしの泊り郭公荷兮」とある。板本は誤

を正したのであらう。
○といへるもよし 原本「といへるも入集有べき也」を改む。

○かえ侍るのみ 若本「替るのみ」若朱本「替り侍るのみ」

○明石を取柄に 原本「明石を勘忍して」を改む。

○君が春 この條『無門關』にも出づ。

○先師語予曰 無門關「翁嵐雪に語て曰」

○此句……たれり 無門關・若本にこの一句無し。

色を君が代に引かけて歳旦となし侍るゆへ、心おもく句きれいならず。

汝が句も已に落付處におゐてきづかはず。そこに尻をすゆべからずと也。

振舞や下座になをる去年の雛

去 來

此句ハ予おもふ處有て作す。五文字古多ぼし・紙ぎぬ等ハ謂過たり。景物ハ下心徹せず。あさましや・口をしやの類ハかなしと、今の冠を置いて窺ひければ、先師曰、五文字に心をこめておかバ、信徳が人の世や成べし。十分ならずとも、振舞にて勘忍有可と也。

田のへりの豆つたひ行螢かな

元トハ先師の斧正有し凡兆が句也。猿ミの撰の時、兆曰、此句見る處なし、のぞくべし。去來曰、へり豆を傳ひ行螢光、闇夜の景色風姿ありと乞ふ。兆ゆるさず。先師曰、兆もし捨バ我ひろはん。幸いがの句に似たる有。其を直し此句となさんとて、終に 　　が句と成けり。

大歳をおもへバとしの敵哉

凡 兆

元の五文字戀すてふと置いて、予が句也。去來曰、このほ句に季なし。信徳曰、戀櫻と置べし。花ハ騷人のおもふ事切也。去來曰、物にハ相應あ

○有可と也 原本「有可との給ひし也」を改む。

○元トハ 原本「此句初ハ」を改む。若本・他本「此句初ハ」

○のぞくべし 原本「のぞくべしといへり」を改む。若本「除べしと云」

○へり豆を 若朱本・他本「田のへりの豆を」

○風姿ありと乞ふ 原本「風姿あり入集せんと乞ふ」を改む。若本・他本「風姿有といふ」

○いがの句に 若朱本・他本・板本「伊賀の連中の句に」

○終に この下二三字分程空白となつてゐる。名を忘れて後で補ふつもりであつたのだらう。若朱本・他本・板本には「萬乎」とある。

○大歳を、この條「無門關」にも出づ。

○戀すてふ 原本「戀をし」を改む。

○戀すてふ 原本「戀をし」を改む。